

外科への誘い

科目責任者：千 田 雅 之（呼吸器外科学講座）

I. 前 文

医学を志して医学部に入学してきても、医学は膨大な体系的知識の上に成り立つものであるが故に、高学年になって行われる臨床実習まで、臨床の現場にふれるのは待つしかないのが現状である。昨今、基礎医学と臨床医学を結びつけて行う教育方法が模索されているが、この自由選択科目では外科手術に着目し、各領域の外科手術の現状を学ぶとともに、手術時の局所解剖の理解、周術期管理における病態生理学の重要性を学ぶことにより、低学年における修学意欲の向上を図るとともに、縫合、結紮、鏡視下手術などの基本的な外科手技を習得することを目的にしている。

II. 受入可能人数

人数は特に制限しない。しかし、縫合、結紮、鏡視下手術などの実習では、一回10名以下とする予定である。

III. 担当教員

千 田 雅 之（呼吸器外科）、福 田 宏 嗣（心臓・血管外科）
種 市 洋（整形外科）、釜 井 隆 男（泌尿器科）ほか

IV. 学習内容

各領域ごとに代表的な手術ビデオを供覧し、それぞれ数回の講義を通じて、必要な解剖学的知識、生理学的知識を低学年にもわかりやすく解説し、2年生から4年生に行われる基礎医学、臨床医学系統講義の学習につなげる。5年生の臨床実習時に必要となる縫合セットを前もって購入して頂き、縫合、糸の結紮の実習を行う。また、年度末にはブタ摘出臓器などを用い、実際の剥離操作、切開、縫合、結紮を行う予定である。

V. 学修の到達目標

- ・課題として取り上げられた各領域の外科手術において基本的な局所解剖、生理学について具体的に説明することができる。
- ・持針器を用いて縫合ができる。糸を結紮することができる。
- ・基礎医学、臨床医学への修学意欲を深め、成績向上に繋げられる。

VI. 成績評価の方法・基準

各講義の後、次の講義の最初に前回講義のミニテストを行う。また、実技に関してはその都度評価を行う。

VII. 使用する教材・資料など

特に必要な教科書はありませんが、解剖学、生理学などの基礎医学で使用する教科書を持っている場合は持参する。年の後半に行う実技では、5年生の臨床実習時に必要となる縫合セットを、前もって購入する。

VIII. 質問への対応方法

科目全体への質問は、科目責任者にメールで質問してください。chidaths@dokkyomed.ac.jp
個別の講義への質問は、担当者にメールなどで質問してください。

IX. 求められる事前学習、事後学習

低学年には初めての講義となるので事前学習は必要ありませんが、基礎医学、臨床医学へつながる様に事後学習（復習）は必要です。後日ミニテストを行いますので学習した項目を30分程度で復讐してください。

X. コアカリ記号・番号

A-2-1, A-2-2, G-3-3, G-4-1) - (2)

XI. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

ミニテストは採点し返却する。実技ではその場で修正が必要なことを指導する。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	○
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	◎
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	